

メッセージアウトライン 出エジプト記4:1~31 「モーセのエジプト帰還」

イスラエル人の子どもとして生まれ、神の不思議な摂理により、エジプトの王子として育てられたモーセはある時、同胞イスラエル人を助けようとしてエジプト人を殺してしまった。そのことは発覚し、彼は遠くミディアンの地にまで逃亡した。神は四十年間荒野で羊飼いとして過ごしていたモーセにシナイの荒野の神の山ホレブで出会われ、奴隷状態となって虐げられている同胞イスラエル人をエジプトから脱出させ、約束の地へ導き上るように命じられた。「わたしが、あなたとともにいる」(3:12)「イスラエルの長老たちはあなたの声に聞き従う」(3:16~18)とのことばも与えられた。しかし、荒野で四十年間過ごしたモーセは、すっかり謙遜にまた慎重になっていた。

[1]モーセは答えた。「ですが、彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『主はあなたに現れなかった』と言うでしょう」

確かに口先だけで民を説得しようとしてもむづかしいであろう。いくらこれは本当だ、真実だ、神が私にそう言われたのだと力説しても、聞く方としては何の証拠やしるしもなければ納得できないだろう。気が変になった老人が何か言っているくらいにしか受け取らないかもしれない。

しかし、主なる神はモーセのそのような心配をご存じであった。

[2-5]「主は彼に言われた。『あなたが手に持っているものは何か。』彼は答えた。『杖です。』すると言われた。『それを地に投げよ。』彼はそれを地に投げた。すると、それは蛇になった。モーセはそれから身を引いた。主はモーセに言われた。『手を伸ばして、その尾をつかめ。』彼が手を伸ばしてそれを握ると、それは手の中で杖になった。『これは彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現れたことを、彼らが信じるためである。』」

この杖は羊飼いの持つ柄の曲がった杖であっただろう。彼がそれを地に投げると蛇になり、またつかむと再び杖になった。蛇はエジプトを支配している悪の象徴で、それを自由に支配できるということはモーセがエジプトの力に打ち勝つ力を与えられていることになる。これは確かにイスラエルの先祖の神である主がモーセに現れたことを彼らが信じるためであると主は言われた。

[6-8]「主はまた、彼に言われた。『手を懐に入れよ。』彼は手を懐に入れた。そして出した。なんと、彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた。また主は言われた。『あなたの手をもう一度懐に入れよ。』そこで彼はもう一度、手を懐に入れた。そして懐から出した。なんと、それは再び自分の肉のようになっていた。『たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしの声は信じるであろう。』」

「ツアラアト」はかつては「らい」(ハンセン病)と訳されていたが、聖書では壁や衣服にも現れてくる症状も記されているので、これは何らかの原因で人体や物の表面が冒された状態のことであり、それゆえ原語のまま「ツアラアト」が用いられている。

このしるしは、エジプトにおいて重労働で苦しめられているイスラエルの状態を病気で白く冒された手で示し、またそれをいやすということで、主なる神がモーセにそのような苦しみの中にある民を救う力を与えられたということ象徴しているのである。このツアラアトという病気はイスラエルでもエジプトでも最も忌み嫌われる病気であり、それゆえ、このような病気を自由に作り出したり、いやしたりできる力は主なる神以外にないということイスラエルの民は信じ、納得するであろう。

[9]「もし彼らがこの二つのしるしを両方とも信じず、あなたの声に聞き従わないなら、ナイル川の水を汲んで、乾いた地面に注ぎなさい。あなたがナイル川から汲んだその水は、乾いた地面の上で血となる」

神はモーセがナイル川から汲んだ水が血に変わるというもう一つのしるしも彼に与えられた。

ナイル川はエジプトに豊かな収穫をもたらす繁栄の源であり魚もたくさんいる。その繁栄の源であるナイル川の水を血に変えてしまうということは、エジプトという国とその王ファラオとナイル川にまつわる様々なエジプトの神々を打ち滅ぼす力を持っていることを示している。モーセはその力も与えられたのである。

[10]これだけしるしが与えられたら、モーセは喜んで行くかというそうではない。彼は自分の弱さをあげる。「…私はことばの人ではありません。…私は口が重く、舌が重いのです」

モーセは以前から雄弁な人ではなく、口が重い人であった。しかも四十年間も荒野で羊を相手にして生きてきたために、しゃべる機会も少なく、ますます口が重くなっていただろう。こんな私がどうしてイスラエルの民を導けるだろうかという心配である。しかし、このことに対しても主は答えられた。

[11-12]「主は彼に言われた。『人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし主ではないか。今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。』」

つまり主なる神こそその権威、力を持つお方であり、その主がモーセの口とともにあって語るべきことを教えると言われるのであり、これほど心強いことはない。

[13]しかしモーセはなんと、まだしり込みする。「ああ、主よ、どうかほかの人を遣わしてください」

ここまできると謙遜を通り越して不信仰になってしまう。証拠としてのしるしも用意され、主がともにいて語るべきことばも教えられるのに、まだ動こうとしないのである。石橋を叩いてもまだ渡ろうとしない状況である。

[14-17]「すると、主の怒りがモーセに向かって燃え上がり…」モーセの不信仰な態度は主の怒りを引き起こすことになった。いっそのこと主はモーセを退けてしまってもよ

かったのであろうが、なおも忍耐強く主は彼の兄アロンを代弁者とすると言われた。アロンは主がエジプトから呼び出されるのである。

「レビ人」というのはモーセと同じくレビ部族に属する者。やがてこの部族は神殿でのまつりごとに専門に携わる部族となる。アロンがモーセのスポークスマンとなって主のみこころを代弁する。主はこのような方法を用意された。そして主はモーセにエジプトで彼の杖を手にとってそれでしるしを行うべきことも告げられた。

[18] それで、もうどうにも言い逃れることができなくなったモーセは、ついに主のことばに従って行動を開始した。彼はまずしゅうとイテロのもとに帰り、エジプトにいる親類の安否を確かめに行くことを理由にいとまごいをする。これに対してイテロは心よく許可を与えた。長い旅になることを彼は知っていなかっただろう。

[19]「主はミディアンでモーセに言われた。『さあ、エジプトに帰れ。あなたのいのちを取ろうとしていた者は、みな死んだ。』」

四十年前、殺人の罪を犯したため、モーセは追われ、いのちを狙われていた。しかし、もうその当時のファラオもまたその部下たち、関係者たちもみな死んだと主は彼に教えられ、あらためて彼にエジプトに帰れと命じられた。エジプトに帰るに当たっての大きな心配がこれでひとつなくなった。

[20] それでモーセは妻や息子たちを連れ、手に神の杖を持ってエジプトへの道に着いた。

息子たちの名はゲルシヨムとエリエゼル。→出 18:3-4

[21-23]主はモーセに言われた。「あなたがエジプトに帰ったら、わたしがあなたの手授けたすべての不思議を心に留め、それをファラオの前で行え。しかし、わたしが彼の心を頑なにするので、彼は民を去らせない。そのとき、あなたはファラオに言わなければならない。主はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もし去らせるのを拒むなら、見よ、わたしはあなたの長子を殺す。』」

ここでイスラエルの主なる神は人をみこころのままにあわれむことも、頑なにすることもおできになるお方であることが分かる。主は全知全能の神であられるのである。それなら、ファラオがモーセのことばを受け入れてすみやかにエジプトから出国できるようにしていただければよいのと思うが、それは神のみが深いご計画のうちに、みこころのままに決められることであるので、私たちがとやかく言うことはできない。そしてここで主はファラオの心を頑なにするとされる。頑なにになるとどうなるのか。当然、モーセの言うことを受け入れない。すると主はそのたびにモーセを通して次々とエジプトにさばきのための不思議なわざを行われる。そしてその最後はファラオの長子を殺すというものであった。

このようにしてイスラエルの主なる神の力が存分に現わされた結果、ついにファラオはイスラエルをエジプトから出国させるようになる。これこそが神のみこころであった。

「イスラエルはわたしの子、わたしの長子である」という表現は、イスラエルは神に選ばれて、神のものとなっている民であるという意味。

[24]「さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。主はモーセに会い、彼を殺そうとされた」

これは不可解な出来事である。主はモーセを出エジプトの指導者に立てて、今彼はエジプトに向かってその歩みを進めているのに、何で彼を殺そうとされるのか。

[25]「そのとき、ツイポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。『まことに、あなたは私には血の花婿です。』」

これはいったい何を意味するのか。実はこの箇所は主なる神がイスラエルに与えた契約のしるしである割礼と関係がある。→創世記 17:10-11 先祖アブラハム以来、イスラエル人は神の民のしるしとして割礼を受けなければならなかった。(割礼とは男子の生殖器の皮を一部切り取ること) しかしモーセの息子たちはミディアンで生まれたので彼はこの大切な儀式をおろそかにしていたのであろう。また妻のツイポラの反対があったのかもしれない。それで主はモーセがこれからエジプトに行くにあたって、すべての面で主のみこころにかなった生き方をするようにと、ここで厳しい警告をされたのであろう。それで瀕死のモーセに代わって妻のツイポラが息子に割礼を施し、その包皮を切って確かな証拠としてモーセの両足に付けたのである。「血の花婿」とはモーセが彼女にとって割礼という血をともなう儀式をもたらした花婿であるという意味と思われる。

[26]「すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに『血の花婿』と言ったのである」

子どもに割礼が施されると、主はモーセを放され、彼がエジプトへ行くことを許された。たぶんツイポラと子どもたちはこの時にミディアンのイテロのもとに送り帰されたのかもしれない。→出 18:2-3

[27]「さて、主はアロンに言われた。『荒野に行って、モーセに会え。』彼は行って、神の山でモーセに会い、口づけした」

モーセが死の危険から癒されると、やがて主からの語りかけを受けた彼の兄アロンがモーセがいた神の山にやって来て。彼に出会い口づけした。ここではエジプトからの道中のことは一切省略されている。神の山とはシナイ山のことと思われる。アロンももう老人であったのでエジプトでの苦役からは解放されて、ある程度自由に行動できたのであろう。これは実に四十年ぶりの再会である。あるいはモーセは以前エジプトの王宮にいたので、もっと前から会っていなかったかもしれない。このようにして二人は懐かしさとともに感激の再会をしたのであった。

[28] そしてモーセは主が彼に語られたすべてのことばと、彼に与えられたしるしのすべてをアロンに告げた。アロンも事の重大さを知り、身の引き締まる思いであったらう。

[29-31]「それからモーセとアロンは行って、イスラエルの子らの長老たちをみな集めた。アロンは、主がモーセに語られたことばをみな語り、民の目の前でしるしを行った。民は信じた。彼らは、主がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した」

血気にはやった四十年前にはモーセは決して同胞イスラエル人に受け入れられず、かえってミディアン之地まで逃亡しなければならなかった。しかし、四十年の歳月はモーセを砕き、謙遜にし、神の召しにまで臆病といえるほどしり込みし、かえって神の怒りを買うほどであった。確かに信仰者は神の前に砕かれて、自分の弱さ、無力さを認める必要がある。しかし、それと同時に今度は神の無限の力とあわれみにより頼んで生きることを学ばなければならないのである。モーセはそのことをこれから日々学びつつ、主のみこころを行い偉大な神の器として用いられていくことになる。

私たちも自分の弱さ、無力さを自覚して、自分は神のために何もできないと思うことがあるかもしれない。しかし、空の器にこそ十分に水を満たすことができるのであり、私たちの弱さや欠けを通して神が働いてくださる時に、そこに神の御栄光が現わされていくのである。私たちは神の前には無力で無に等しい者であることを自覚しつつ、それゆえ、なおいっそう主なる神により頼んで、主に御力を現していただき、みわざをなしていただく者となっていきたい。そのようにして私たちの人生が神のために用いられるならばすばらしいことである。

→ I コリント 6:19～20